MfG_J_Kawai_Tsuginosuke_another_evaluation

はじめに

1. 石碑と碑文撰文、題額

2. 石碑の関連人物
(1)題額の黒田清隆　「闘うな」という手紙を継之助に送ったが届かなかった。
　同様の手紙を長岡藩士の森源三、鵜殿 団次郎に送付。
(2)森源三
(3)鵜殿 団次郎
(4)碑文撰文の三島中洲
(5)黒田清隆と森源三の共通の師の江川英龍

3.「壺中天」・改訂版
(1)補足　只見の地で
(2)只見の地に来て、感じたこと。
(3)私論・「壺中天」　2025Dec追記

4. 碑文の解説
　～　長岡市教育委員会編「悠久山のいしぶみ」 よりコピーしました。

別文書　MfG_J_Kawai_Tsuginosuke_and_reformatio
　継之助の軍政改革と武器進歩のストーリー

　基本のお話
　A. 藩の武装中立について
　補足　作成英文

　B. 互尊止戈、兵戈無用と止戈為武

　解説
　1. 長岡・河井継之助記念館での解説
　2. 河井の財政改革に先行した長岡藩財政改革
　3. 河井継之助の行った改革のリスト
　4. ライフルの装備
　5. 南北戦争と「風と共に去りぬ」(”Gone with the Wind”)
　補足　長岡出身の小説家、火坂雅志さんの解釈
　　只見の地で　「壺中天」(2022Sep)
　補足　八十里越えに向かう敗走のルート

はじめに

悠久山にある刀隊・槍隊の碑は、明治二年、小林虎三郎撰文の碑です。
そのうち、刀隊碑では隊員を褒め称える文なのですが、槍隊碑では、時代の空気もあったのでしょうが、継之助に対する激しい叱責の文です。
河井継之助についての長岡での評価は、河井継之助記念館ての顕彰の雰囲気はあるものの、町全体としては、いまだ定まってはおらず、というより負の方向に固定されている感があり、その代表が、槍隊碑の文と云えます。

ここでは「故長岡藩総督河井君碑」の碑文、題額の作成者と碑文から、河井継之助の、あまり語られない、別の側面を語りたいと思います。

たまたま、題額を書いた新政府軍参謀の黒田清隆が、北越戦争に際して、長岡藩を降伏させて河井継之助を登用すべきと考え、「闘うな」という手紙を継之助に送ったが届かなかった。同様の手紙を、河井の他、長岡藩士の森源三、同様の手紙を、河井の他、長岡藩士の森源三(師の江川英龍の塾生で旧知の間)、鵜殿団次郎(長岡生まれの幕臣)に送っているという「トリビア」的な話を聞き、調べてみました。黒田清隆が、継之助のどこに惹かれたか、わかりませんが、恐らく、単なる武闘派ではない、民政にも長けた人物と見抜いたのでしょう。
そのことは、三島中洲の石碑の碑文撰文で、わかります。
石碑の碑文撰文、題額の二人に依頼した経緯については、かろうじて撰文に三島中洲が述べている程度で、黒田清隆に題額を依頼できた訳については、私は知りませんが、ありがたいストーリーがあったに想像しています。

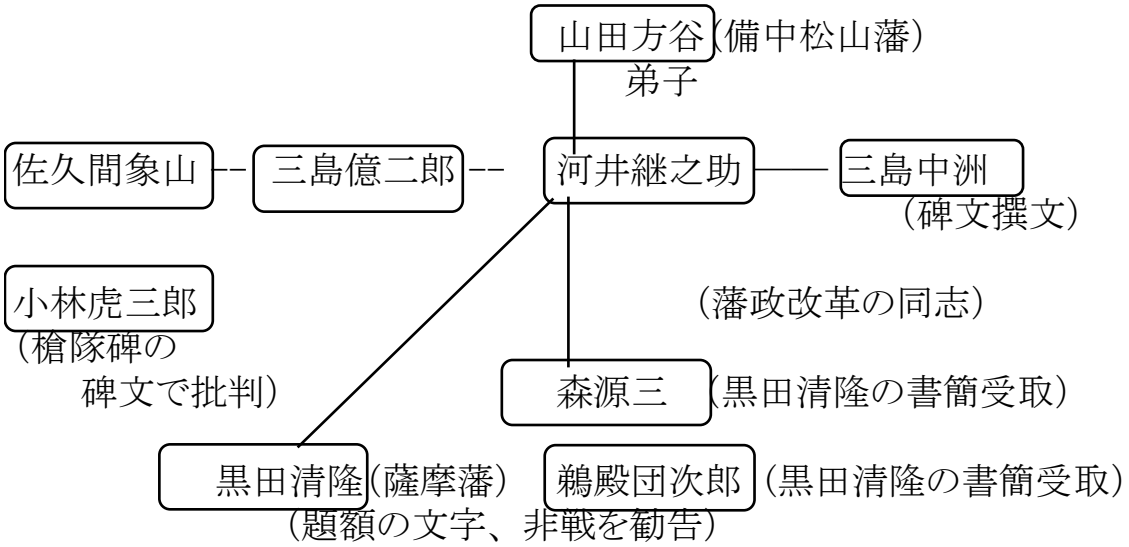
継之助の、武装中立などの奥にあった真の心は、どんなもの何だったか。
郷土史料館にある書、「　民は国の本　吏は民の雇
　　西人の語を録す 子正主人に為す」
これも、根本のひとつと思います。
西欧の商人と交流して、日本の「子正」という儒学者のために
西欧の民主主義とはこういうことだと語った言葉だそうです。

以下の、維新後に億二郎が残した言葉と同じ考え。
「薩摩、長州が、欧州列強の攻撃に数日も耐えられなかったことは、惰眠を貪っていたということで、誠に恥ずべきことである。国内で甲乙の強弱を論ずるべき時ではなかろう。」
「今泉鐸次郎談　　長岡恢興の恩人　三島億二郎翁」

これが慈眼寺での最後の訴えになったのではないか。
「今、いかなる時か、ご存知か。外国が日本の周辺を窺っているのに・・・」

外国と戦ってはならぬ、という気持ちが、根本にあったと思います。
「故長岡藩総督河井君碑」には、これが込められており、維新直後の当時、これを云える人が、長岡の中におらなかった、また、そう云う人の存在が許されなかったのでは、ないでしょうか。

継之助の非戦・中立の思想の成り立ちは？　周囲は皆、反対だったのでは？



山田方谷(師)
直接の書簡・記録は残っていないが、「戦わずして国を治める」方谷の
思想から見て,継之助が相談しておれば、非戦を勧めた可能性は高い。
三島中洲(備中松山藩での学友)
悠久山の碑文からわかるように、継之助の「民政・中立」思想を深く理解していた。

黒田清隆は、江戸 江川英龍塾で森源三から長岡藩の実情を聞き、河井という
人物を知って、何とかしたいと思った。
薩長同盟の影の立役者であったほどの黒田が、河井を何とかしたい、
なぜ、手紙を送るまで考えたのか、その背景を知りたい。

三島億二郎
億二郎は開戦には反対であったが、「前島の会談」にて、『こうなってしまった
以上、継サだけを死なせるわけにはいかない。最後まで闘い、ともに死のう。』
といい、結果的に、開戦に反対の藩論を逆転回する契機をつくる役回りを
演じてしまった。
『現代人からすれば不合理だが、剛健質実の藩風とみるべき』、という意見もある。
　(2023年、三島億二郎顕彰法要時の第四北越ミュージアム開設責任者の井辺氏講演)
小林虎三郎
子供のころからの友人であったが、明治2年建造の槍隊碑の碑文で、
河井継之助の開戦の判断を痛烈に批判している。
鵜殿団次郎
中国、インドでの列強侵略や、1861年のロシア軍艦による、海軍基地建設を
目的とし対馬不法占拠事件などで、外圧の脅威を熟知していた蕃書調所教授
であった団次郎としては、北陸戊辰戦争はあり得ない選択と認識していたはず。

河井君碑と黒田清隆、三島中洲

1．石碑と碑文撰文、題額
2．石碑の関連人物
(1)題額の黒田清隆　「闘うな」という手紙を継之助に送ったが届かなかった。
　　同様の手紙を長岡藩士の森源三、鵜殿 団次郎(後に幕臣)に送付。
(2)森源三
(3)鵜殿 団次郎
(4)碑文撰文の三島中洲
(5)黒田清隆と森源三の共通の師の江川英龍

1．石碑と碑文撰文、題額
碑の正式な名称:「故長岡藩総督河井君碑」
悠久山公園内にありまするが、元々は長岡城跡(現在の長岡駅前)に
建てられていた。 1918年(大正7年)に悠久山移設されました。
碑石の高さと巾、386cm, 207cm　台を含めた総高　440cm　と公園内最大クラス。

碑文: 継之助が備中松山藩で学んだ際の師・陽明学者・山田方谷の
　　弟子、三島中洲が撰文。
題額: 新政府軍の参謀として長岡城攻略にあたった黒田清隆によるもの。
敵味方の関係を超えて、河井継之助の人物や功績が高く評価されていたことを
示すものとして知られています。
北越戦争に際しては、黒田は長岡藩を降伏させて河井継之助を登用すべきと
考え、「闘うな」という手紙を継之助に送ったが届かなかった。
同様の手紙を、河井の他、長岡藩士の森源三、鵜殿団次郎に送っているとのこと。
黒田清隆と森源三は、師の江川英龍の塾生で旧知の間柄。

2．石碑の関連人物
(1)黒田清隆(くろだ きよたか1840- 1900)は、日本の陸軍軍人、政治家。
1888年(明治21年)～1889年(明治22年)にかけ第2代内閣総理大臣を務めた。
陸軍軍人としての階級は陸軍中将。栄典は従一位大勲位伯爵。通称は仲太郎、了介。
薩摩藩士として、幕末に薩長同盟のため奔走し、明治元年(1868年)から明治2年
(1869年)の戊辰戦争に際しては北越から庄内までの北陸戦線と、箱館戦争で
新政府軍の参謀として指揮を執った。
開拓次官、後に開拓長官として明治3年(1870年)から明治5年(1872年)まで
北海道の開拓を指揮。開拓使トップを兼任しつつ、政府首脳として東京にあり、
明治9年(1876年)に日朝修好条規を締結し、同10年(1877年)の西南戦争では
熊本城の解囲に功あり。翌年に大久保利通の暗殺後、薩摩閥の重鎮となった。
薩摩藩士・黒田仲佐衛門清行の長男として生まれた。黒田家は家禄わずか4石の

下級武士だった。
なお、明治期に子爵になった黒田清綱の家（記録奉行や教授を輩出していた。代々小番。清綱の甥・養嗣子が黒田清輝）と同族であるが、遠縁であるという。
文久3年（1863年）、薩英戦争に参加した後、江戸で砲術を学び、皆伝を受けた。
慶応2年（1866年）の薩長同盟に際しては、盟約の前に薩摩側の使者として長州で同盟を説き、大坂で西郷吉之助と桂小五郎の対面を実現させた後、
再び長州に使者として赴いた。
慶応4年（1868年）の鳥羽・伏見の戦いでは薩摩藩の小銃第一隊長として戦った。
同年3月、北陸道鎮撫総督・高倉永祜の参謀に、山縣有朋とともに任命され、
鯨波戦争に勝利した。

（2）森源三(1836-1910)は、幕末の越後長岡藩士、明治期の地方官吏・政治家。
青年時代は江川英龍の塾で洋学と砲術を学び、北越戦争では河井継之助指揮下で戦った。長岡敗戦後は藩庁に勤務して、戦後の長岡の復興に努めた。
明治2年（1869年）には藩主・牧野忠恭の命により森源三と改称し、また戦死した
河井継之助の遺族を扶養した。
森の私邸は後に北海道知事公館の前身となった
戦死した元長岡藩総督・河井継之助に実子がいなかったが、明治15年（1882年）
河井家の再興が許されたため、森源三の次男・森 茂樹を河井家の養子として後継させている。 茂樹は、継之助の姉・千代の孫にあたる。

（3）鵜殿 団次郎（うどの だんじろう、1831 -1869年1月）
幕末期の洋学者。蕃書調所教授。諱は長養、号は春風。
長岡藩の藩校崇徳館で学問を修めた後、江戸で蘭学や英学を学ぶ。その才を勝海舟に買われて幕臣に登用され、文久2年（1862年）に蕃書調所（前身は蛮書和解御用）の教授となり、慶応4年（1868年）には軍艦役格より幕府目付となる。その一方、慶応2年（1866年）に藩に軍制改革に関する意見書を提出するなど、幕末の混乱に瀕した藩のために尽力するも、明治元年（1868年）、38歳で病死した。河井継之助と並ぶ長岡藩の秀才であった団次郎の死は、長岡藩の大きな損失であったとされる。著書に『万国奇観』は亡くなった後、明治5年（1872年）刊。 異母弟に海援隊隊士の白峰駿馬がいる。

悠久山には、明治十二年建立の石碑　石碑の撰文は、右半分が勝海舟、
左半分が伊東祐亨(すけゆき)。

（4）三島中洲（ちゅうしゅう　1830～1919）
二松学舎列伝　創立者（学祖）三島 中洲
名は毅（き）、字は遠叔。天保元年、備中窪屋郡中島村（後の中洲町、
現在の岡山県倉敷市中島）に生まれた。11歳から学問を志し、14歳で

儒学者山田方谷の門に入り陽明学を学んだ。さらに斎藤拙堂のもとで
見識を深め昌平黌において佐藤一斎に学んだ。30歳の時、備中松山藩に
仕え、幕府老中でもあった藩主板倉勝静とともに激動の幕末を経験した。
明治維新後、新政府の命により上京、新治裁判所長、大審院判事
(現在の最高裁判所判事)を務めた。明治10年、官を辞し「漢学塾
二松学舎」を創設。多くの子弟を育成し、漢学・東洋学の発展に尽力した。
のちに東京高等師範学校教授・東京帝国大学文科教授・東宮御用掛・宮中
顧問官を歴任した。

(5)黒田清隆と森源三の共通の師の江川英龍
江川英龍(えがわ ひでたつ、1801- 1855　通称:坦庵)
英龍自身は早くから蘭学者幡崎鼎の教えを受けており、維新の三十年も前に、
海防に関する建議を行っている。その後、英龍は長崎に赴いて近代砲術を学ぶと
共に、幕府に高島流砲術を取り入れて江戸で演習を行うよう働きかけた。
これが実現し、英龍は水野忠邦に登用され、以後は西洋砲術の普及に努め、
「江川塾」を江戸に開き、全国の藩士にこれを教育した。
佐久間象山、大鳥圭介、橋本左内、桂小五郎(後の木戸孝允)、黒田清隆、
大山巌、伊東祐亨などが彼の下で学んでいる。
幕末に伊豆韮山代官を務め、韮山反射炉の建設、
品川台場(お台場)の築造、日本初のパン(兵糧パン)の製造、
種痘の普及、西洋砲術の導入など、国防、西洋文化の導入、殖産興業に
多大な功績を残した「幕末の万能人」です。

河井継之助(1827-1868)
勝海舟　(1823-1899)
　江戸幕府陸軍最後の陸軍総裁、明治政府の初代海軍卿を務めた。
伊東祐亨 (1843-1914)
　初代連合艦隊司令長官を務めた。

3.「壺中天」・改訂版

(1)補足　只見の地で　　(22Sep 春日)

ガイドの会のバス研修で、只見の河井継之助記念館の「壺中天」を
見てきました。　大きな書でしたが、改めて感じたこと。

司馬遼太郎さんの長編時代小説、『峠』は、1966年(昭和41年)11月から
1968年(昭和43年)5月まで『毎日新聞』に連載され、1968年に新潮社で
刊行されました。「壺中天」は、その司馬さんが只見を訪れた1974年(昭和49)
に、「山水相應蒼龍窟]とともに、揮毫されたものです。
「壺中天」を揮毫した意義を、どのように解釈すべきか、についてですが、
司馬遼太郎さんは随筆集、『風塵抄 二』(1996年中央公論社刊)の中の、
「壺中の天」という名の章で、次のように書いています。なお、1),2),3)の
分かちは、春日が勝手につけました。(初出は1992年8月産経新聞)

1)自らの軍歴と年一度の中隊仲間の集まり
2)その経験の位置づけとして、壺中天の紹介
「自分だけの理想郷というすばらしく肯定的な意味と、極めて狭小で手前
勝手の見解という否定的な意味とをあわせ持っている。」と説明しています。
3)近代史のなかの「壺中の天」。
日中戦争突入の無謀さを、「明治大正の日本は壺中の天ではなかった。
昭和になって国ぐるみ壺の中に入った。」と説明しています。

このように、92年の時点では、「壺中の天」を否定的な意味に捉えています。
司馬遼太郎さんが只見訪問で、「山水相應蒼龍窟]とともに「壺中天」という
文字を書にしたときの気持ちに、否定的な意味はなかったか、考えさせられます。

(2) 只見の地に来て、感じたこと。
実際に、終焉の地の只見を見て、いろいろ感じました。
一番は、地形でした。自分は、山古志のような中山間地をイメージして
いましたが、実際は山中の大きな平地で、全く予想外でした。
この辺は、新潟・福島県境で、只見川としては中流域のようです。大規模
な洪水もあり、こういう平地が生まれたのでは、とか、想像が膨らみます。
2番目は、やはり、壺中天を筆にしたときの司馬遼太郎さんの心のなか。
小説「峠」執筆時とエッセイ「壺中天」執筆時との、時間差、認識の
変化でしょうか。
三番目は、記念館の展示解説をして下さった現地ガイドさんの、
「継之助愛、長岡愛」に溢れたお話も、よかったです。
田子倉から塩沢まで総戸数292の村に、一万人を超す、長岡はじめ
米沢、会津の各藩兵が続々押し寄せ、その食料調達や受け入れ対応
がままならない責任を感じて自刃した丹羽族(やから)の悲劇もあった
のに、避難軍勢の急場を救った。 会津を助ける軍勢として扱い、さらに
長岡での三カ月の防戦を、常在戦場の精神あればこそと讃える姿勢は、
感謝しかない。 話も素晴らしく、ガイドの一つのお手本を見た感じです。
医王寺のお墓も、きれいに管理されており、長岡の栄涼寺のお墓との
余りの違いに、戸惑いさえ感じました。

(3) 私論・「壺中天」　2025Dec追記
「壺中天」は継之助が言った言葉ではないが、もしかしたら、継之助は死後に、
自分達の行動があったからこそ、反対派が敗戦で一掃され、結局は日本を
外国列強の侵略から救えた、民のためになったのではないかと、思ったかも
知れない。

河井継之助の碑

故長岡藩總督河井君碑

陸軍中將從二位勳一等伯爵
黑田清隆題額

安政己未秋長岡河井君
來我松山就先師方谷山田
先生請從學　先生方柄用
以不暇教授辭之　君曰吾
欲學先生作用　非區々質
經問文　先生偉其言許之
　余因得納交　深信其人
倜儻他日必有所爲　既而
海内多故遂及戊辰之變君
抗王師戰死　余聞之驚歎
　知其事必出不獲已而悲
其才有所不盡也　頃者君
故舊相謀將樹碑表遺蹟徵
余銘　余舊誼不可辭　乃
據狀叙之　曰君諱秋義稱
繼之助　河井氏　其宅有
喬松　因號蒼龍窟　世仕
長岡藩主牧野氏　考諱秋
紀妣長谷川氏　文政十年
正月元旦生君　君幼豪放

安政己未の秋、長岡の河井君我が松山に来り、先師方谷山田先生に就きて従学せんことを請ふ。先生方に柄用せられ、教授に暇あらざるを以て之を辞す。君曰く、「吾先生の作用を学ばんと欲す。区々経を質し文を問ふに非ず」と。先生其の言を偉なりとして之を許す。余因りて交を納るるを得たり。深く其の人の倜儻、他日必ず為す所有るを信ず。既にして海内多故、遂に戊辰の変に及び、君王師に抗して戦死す。余之を聞き驚歎す。其の事必ず已むを獲ざるに出づるを知り、而して其の才の盡さざる所有るを悲しむなり。頃者君の故旧相謀り、将に碑を樹て遺蹟を表せんとし余に銘を徵す。余旧誼辞すべからず。乃ち状に拠りて之を叙す。曰く君諱は秋義、継之助と称す。河井氏なり。其の宅に喬松有り。因りて蒼龍窟と号す。世〻長岡藩主牧野氏に仕ふ。考諱は秋紀、妣は長谷川氏なり。文政十年正月元旦君を生む。君幼より豪放にして、学に勉めず。嘗て騎を学ぶ。疾駆狂奔して、師範に従はず。師叱して之を下す。君屈せずして

安政六己未の秋、長岡の河井君がわが松山（備中松山藩）に来訪して、わが師の山田方谷先生に就いて学問したいことを願い出た。先生は家老職に登用されていて、教授をする暇がないことで断わられた。君は「私は先生の言動だけを学びたい。小さな経書の語意を正したり、文章などの教えを乞うものではない」と言う。先生はその返答を良しとされて、入門を許された。その故に私は彼との交わりが出来たのである。彼の人は、衆人とは特別違った活達さを持っていて、将来は必ずや何事かで世に出る人だと信じた。時も変って国の内外共に多くの事件が起き、遂に戊辰戦争となって、君は官軍に抵抗して戦死した。私はこれを聞いて、驚くと共に悲しんだ。その件では、事実止むを得ない事情もあったことを知って、君の才能が充分発揮されなかったことを悲しんだ。最近、君の古い知人達が相談して、碑を建て業績を掲げたく思って、私に銘（心に残る文）を依頼して来た。私は河井氏への友誼もあって断れなく、ここに業績を記した書状をもとに文を作ったので、以下述べる。

君の諱（生前の本名）は秋義で継之助とも言った。姓は河井氏である。その自宅に高い松の木があるので蒼龍窟との号をもつ。代々は長岡藩主牧野氏に仕えた。父の諱は秋紀。母は長谷川氏の出で、文政十年正月元旦に君を生んだ。君は幼少時から

不勉學　嘗學騎　疾驅狂
奔不從師範　師叱下之
君不屈曰騎知馳與止足矣
其不受人羈絆往々如此
稍長折節讀書　然不修章
句訓詁唯解大意　至會心
處反覆朗誦終身不忘　常
以經世自期　武術獨好砲
鍛錬自得命中如神　年二
十五始游江戸執贄齋藤拙
堂翁及古賀謹堂佐久間象
山諸氏之門　會米艦來浦
賀乞互市　徳川幕府處之
失宜海内騒然　藩主擢君
爲參政屬　歸藩有所計畫
而執政不容　遂辭職自
鬻田園募義勇令東上衞藩
邸尋欲自發　執政不許
欲學蘭書知外情有故不果
安政戊午考致仕襲其祿
一百二十石　此年再游江
戸　翌年游關西從山田先
生于備中凡一年　深服之

曰く、「騎は馳と止とを知れば足れり」と。其の人の羈絆を受けざること往々にして此くの如し。稍長じ節を折りて書を読む。然れども章句訓詁を修めず唯大意を解くのみ。会心の処に至れば、反覆朗誦して、終身忘れず。常に経世を以て自ら期す。武術は独り砲を好み、鍛錬自得して、命中すること神の如し。年二十五、始めて江戸に游び贄を斎藤拙堂翁及び古賀謹堂、佐久間象山諸氏の門に執る。会〻米艦浦賀に来り互市を乞ふ。徳川幕府之に処して宜を失ひ、海内騒然たり。藩主君を擢でて参政の属と為す。藩に帰り計画する所有り。而れども執政容れず。遂に職を辞し。自ら田園を鬻ぎて、義勇を募り、東上して藩邸を衛らしめ、尋いで自ら発せんと欲す。執政許さず。蘭書を学び外情を知らんと欲せしも、故有りて果さず。安政戊午、考致仕し、其の禄一百二十石を襲ぐ。此の年再び江戸に遊ぶ。翌年関西に游び、山田先生に備中に従ふこと凡そ一年。深く之に服す。嘗て余に謂うて曰く、「吾諸大家に歴事す。其の学の何如を知らず。事業に活用するに至りては、則ち我が方谷先生に若くは莫し」と。遂に長崎に游び、洋人に接し、外情を探りて帰る。此の行君の得

大らかで小事にこだわりを持たなかったが、学問は好まなかった。ある時に乗馬を学んだが、馬を疾走させるだけで師範の指示に従わない。師範は叱って馬から下ろした。君は師の言葉に屈服しないで「乗馬は、走らせることと止まることを知れば充分である」と言った。彼が人の束縛を受けない態度は、往年はこのようであった。やや成長をしてから、自らを戒めて書を読むようになったが、文章や句の個々の意味や解釈を履修しないで、ただおよその意味を汲むだけであった。たまに心の琴線にふれる文に出合うと、反覆朗読をして終生それを忘れなかった。常に、世を治めることを自らの目標とした。武術では自らの好みが銃砲で、鍛練の結果自力で修得して、命中率は神技のように高かった。二十五歳で始めて江戸へ遊学に上り、礼物持参で斎藤拙堂・古賀謹堂・佐久間象山らの門に入った。そのころアメリカの軍艦が浦賀に来訪して、交易を望んだ。幕府はこれに対処したが、適した時を見過したために国内が騒然となった。藩主（忠雅・老中職）は君を抜擢して、藩政参加の一員に加えた。帰藩後に自ら企てた策略を上申したが、国家老は意向を取り上げず、遂に辞職をした。彼は自ら田畑を売り払って、先ず義勇軍を組織して出府させ藩邸を守らせ、次いで自らが江戸へ向おうとした。しかし、国家老は許さなかった。また、オランダの書物を学んで外国の事情を知ろうともしたが、事情のために果せなかった。安政五（一八五八）戊午（つちのえうま）の年、父が辞職して隠居したために、家禄百二十石を嗣いだ。この年に再び江戸へ遊学をした。

嘗謂余曰吾歴事諸大家
不知其學何如　至活用
事業則莫我方谷先生若焉
遂游長崎接洋人探外情
而歸　此行君所得最多云
文久中藩主爲幕老召君
爲公用人．君知時勢不可
爲勸主辭職　不用　乃自
辭歸藩　主亦尋罷　君自
此弄文墨耽奕棊或豪遊觸
藩禁　蓋皆出憤世之餘也
時幕府興征長之役　君
竊歎曰恐吹毛求疵　慶應
乙丑夏刈羽郡民嘯集將迫
城下　藩主命君鎭之　君
提十字槍單身入衆中懇諭
諭畢瞋眼勵聲曰汝等不
從先殪我而後進　我亦揮
槍當之　衆相顧逡巡遂謝
罪而散　執政始知君才可
用　此冬任郡奉行尋兼町
奉行　遂自參政陞執政
前後多所釐革　設懲役場

る所最も多かりしと云ふ。文久中、藩主幕老と為り、君を召して公用人と為す。君時勢の為すべからざるを知り、主に勧めて職を辞せしむ。用ひられず。乃ち自ら辞して藩に帰る。主も亦尋いで罷む。君此れより文墨を弄し奕棊に耽り、或は豪遊して藩禁に触る。蓋し皆世を憤るの余に出づるなり。時に幕府征長の役を興す。君竊に歎じて曰く、「恐らくは毛を吹きて疵を求めん」と。慶応乙丑の夏、刈羽郡民嘯集し、将に城下に迫らんとす。藩主君に命じて之を鎮めしむ。君十字槍を提げ、単身衆中に入りて、懇諭す。諭し畢り、眼を瞋らし声を励まして曰く、「汝等従はずんば先づ我を殪して後進め。我も亦槍を揮って之に当らん」と。衆相顧みて逡巡し、遂に罪を謝して散ず。執政始めて君の才の用ふべきを知る。此の冬郡奉行に任じ、尋いで町奉行を兼ぬ。遂に参政より執政に陞る。前後釐革する所多し。懲役場を設け、妓館を廃し信濃川の船税を除き士禄を改めて上下をして大差無からしめ閥閲を抑へ、奢侈を戒め文武を励ます。賞罰厳明にして、令行はれ禁止み、士気大いに振ふ。又理財に長じ、政に従ふこと僅かに二年にして、府庫の充溢旧に倍す。丁卯冬、大

翌年は関西に行って、備中の山田方谷先生の下に学んで凡そ一年。深く先生に敬服した。或る時、私へ「我は大先生達から次々と学んだが、その学問の何であるかも充分に分らない。しかし、事業に通じる生きた学問に関しては、方谷先生の学問に優るものはない」と言った。この時君の心の収獲は最高であったという。文久年間、藩主忠恭（ただゆき）公は老中職となられ、君を呼び寄せて公用人とされた。君は時勢が最早やどうにも止まらない事情を知って、藩主に辞職を進言した。しかし、取上げられなくて自らが職を辞して帰藩した。その後、藩公は老中を辞された君はそれから詩文や書画に親しんだり、囲碁を愛し、或る時は豪遊をして藩の禁制にふれるなどの日々を送った。これも皆、世を悲憤するがための行動と思われた。そのころ、幕府が長州征伐の軍事行動を起こした。君はひそかになげいて「恐らくは失敗するであろう。知らぬ顔でいればよいものを、わざわざ毛を吹いて傷跡を探すようなことをする」と言った。慶応元乙丑（きのとうし）（一八六五）の夏、刈羽郡で群集の騒動が起きて、今まさに城下にせまろうとする勢いであった。藩公は君に命じて鎮圧へ向わせた。君は十文字槍を携えて、一人で群集の中へ入って、懇々と説諭をした怒って、目に怒気を表わし声を大にして「お前達が服従しない気なら、先ず我を倒してから進め。我も槍をふるってお前達にむかおう」と言った。群集は互に顔を見合わせためらって、遂に謝罪して解散をした。藩の家老達は、始めて君の才能の用いるべきことを知った。この冬に郡奉行（こおりぶぎょう）となって、次いで町奉行

廢妓館除信濃川船税改士
祿使上下無大差抑閥閱戒
奢侈勵文武　賞罰嚴明令
行禁止士氣大振　又長理
財從政僅二年府庫充溢倍
舊　丁卯冬大將軍還政
朝廷輙納之廢幕府　君奉
藩主西上上書論其不可
不報　先伏見役二日諫德
川公止出兵　亦不聽　歎
曰時乎命乎　海内自此亂
　不若退撫封民　東軍果
敗績　君護主間關還江戸
撤藩邸歸長岡　明治戊辰
三月也　閏四月薩長諸藩
奉勅征奥羽　一軍自越後
進　會桑諸藩出兵防之
遂迫長岡共戮力　君峻拒
之自守封疆以待　征東監
軍來駐小千谷　乃撤疆兵
身穿禮服單騎馳謁曰今日
是何時　外國窺四邊　而
内戰自弊之爲　願使我藩

将軍政を還す。朝廷輙ち之を納れ、幕府を廃す。君藩主を奉じて西上し、上書して其の不可を論ず。報いられず。伏見の役に先だつこと二日、徳川公を諫め、兵を出すを止む。亦聴かれず。歎じて曰く、「時なるか命なるか。海内此れより乱れん。退きて封民を撫するに若かず」と。東軍果して敗績す。君主を護りて、間関して江戸に還り、藩邸を撤して長岡に帰る。明治戊辰三月なり。閏四月、薩長諸藩、勅を奉じて奥羽を征す。一軍は越後より進む。会桑諸藩兵を出して之を防ぐ。遂に長岡に共に力を戮せんことを迫る。君之を峻拒し、自ら封疆を守りて以て待つ。征東監軍来りて小千谷に駐まる。乃ち疆兵を撤し、身礼服を穿ち、単騎馳せ謁して曰く、「今日は是れ何の時ぞ。外国四辺を窺ふ。而るに内戦自ら弊るることを之為さん。願はくは我藩をして自ら守り民を養ひて、他日の報效を図らしめよ」と。監軍素より其の奥羽に与するを疑ふ。悃請すること一晝夜、終に聴かれず。乃ち帰り同志を会し、謀りて曰く、「吾今自刎せん。請ふ首級に附するに三万金を以てし、以て王師に献じ、以て赤心を表せば、則ち長岡或は免れん」と。衆可かず。時に王師既に封内を侵

を兼ねた。そして、奉行から家老へと昇進した。その間に多くを改革していった。懲役場を設け、妓楼を廃止し、信濃川の通船税も廃止。家禄の改正をして上下の大差をなくして、門閥を抑制し、ぜいたくを戒めては学問・武芸を奨励した。そして賞罰を明確にしたので、命令は行き渡って、士気は大いに高まった。また、財政にも通じて、政治に関与してから僅か二か年で、藩の財産は旧倍へと充実した。慶応三丁卯年の冬、将軍は大政を奉還し、朝廷はこれを許して幕府は廃止された。君は藩公（忠訓）と共に出京して政府へ献言書を差上げ、奉還がよくないことを進言したが、回答は無かった。鳥羽伏見戦争の二日前、徳川慶喜公へも出兵の中止を諫めたが、これまた応答は得られなくて「時勢か、天命かは知らないが、国の内外共にこれからは困乱するであろう。むしろ自藩の領内へ退去して、領土と領民を守る以外に道はない」と悲歎にくれた。結果は、東軍の敗戦であった。急いで藩公を守護し苦労しながら道をたどって江戸へと帰り着いた上、藩邸を撤去して長岡へと帰った。時は明治元戊辰年の三月であった。閏四月、薩長諸藩は詔勅を奉じて奥羽征討へと向った。一方の軍隊は越後路へ進撃した。会津・桑名藩では将兵を出してこれを防いで、遂に長岡藩に彼等への協力を迫った。君はこれを厳しく拒絶し、自らの領土の境界を守っては西軍を待った。征討軍の軍監（監督者）が来て、小千谷に駐留した。そこで藩は境界の守備兵を撤退させ、君は礼服に正して一騎で出張して軍監へ謁見し「今、いかなる時かをご存

自守養民圖他日報效　監軍素疑其與奥羽　悃請一晝夜終不聽　乃歸會同志謀曰吾今自刎　請附首級以三萬金以献王師以表赤心則長岡或免矣　衆不可

時王師既侵略封内　君乃憤然決意曰我恭順不敢抗拒而彼來虐無辜之民是薩長賊耳　非王師也可不禦乎　藩主乃以君爲藩兵總督　始與會桑共據榎嶺防戰十晝夜　王師不能進　別遣一軍襲長岡五月十九日城遂陷　藩主逃會津君聚散兵于加茂奥羽諸藩兵亦來會　遂進擊王師于今町走之　兵氣頗振　乃置牙營于見附王師既據長岡互築胸壁連亘十數里横斷北越日夜砲戰　勝敗不決者五十餘日

城北有大澤　曰八町

略す。君乃ち憤然として意を決して曰く、「我恭順にして敢て抗拒せざるに、而も彼来って無辜の民を虐ぐ。是れ薩長は賊のみ。王師に非ざるなり。禦がざるべけんや」と。藩主乃ち君を以て藩兵総督と為す。始めて会桑と共に榎嶺に拠りて、防ぎ戦ふこと十晝夜。王師進む能はず。別に一軍を遣して、長岡を襲ふ。五月十九日城遂に陥る。藩主会津に逃れ、君散兵を加茂に聚む。奥羽諸藩の兵も亦来り会す。遂に進んで王師を今町に撃ちて之を走らす。兵気頗る振ふ。乃ち牙営を見附に置く。王師既に長岡に拠り、互に胸壁を築き、十数里に連亘し、北越を横断

泉翠池

知か。外国が日本の周辺から窺っているのに、内戦で自国を滅亡させようとしている。願わくば我藩に自国の領土を守らせて領民を養わせ、他日のお役に立たせて欲しい」と言った。軍監（岩村高俊）は、既に長岡藩が奥羽同盟に入っていることを疑った。誠を尽くして願うこと一昼夜に及んだが、終に聴かれなかった。それで帰陣の上、同志に対して「我は只今自らの首を切る。この首と三万両を付して官軍に献上して忠誠心を表せば、多分長岡は戦火から免れられる」と言った。味方の将兵はこれを拒否した。その時、官軍側は既に藩境を突破して、長岡領へと侵入した。君は憤然と決意して「我藩は恭順の形をとって、進んで抵抗をしなかったのに、彼の軍は来襲して理由なく領民を苦しめる。この様な薩長は賊徒であって、官軍ではない。防戦をすべきである。」と言った。藩公は、直に君へ藩軍の総督を命じた。ここで始めて会津・桑名軍と行動を共にして、榎峠で防戦することが十昼夜に及んだ。官軍は進撃が不能となったので、別動隊の一軍を派遣して渡河急襲させた。五月十九日、遂に長岡城は落城となった。藩公らは会津へ逃れ、君は四方に散った将兵を加茂へ結集させ、奥羽諸藩の兵士も、またそこへ参集した。その後、進んで今町の官軍を撃退して、士気は大いに挙がった。それで本営を見附に置いた。官軍は五月から長岡に在ったので、両軍共に胸までの陣地を築いて、それが十数里と続いて北越を横断する有様で、日夜砲戦が続いた。互いに勝敗は決まらなくて、五十余日が過ぎた。長岡城の北に大沼があ

會長霖潦水氾濫王師懈警
備　君圖暗襲使人夜々測
水量且架棧蘆葦間　而轉
陣山中爲不知豫定部署蓄
炬材　七月二十四日水減
棧成　乃報之奥羽兵自率
死士四百冒夜逕澤八面放
火鼓噪攻城　城兵狼狽不
戰而潰　比天明全復長岡
　適　王師亦期此晨大擧
衝我牙營豫聚精兵于見附
　顧城中烟燄驚愕反戰
我兵當之頗苦　君乃馳援
　飛丸中左臉骨碎不能復
指揮　而奥羽兵自背破
王師入城　王師四散退數
里外　然城兵聞君重傷氣
大沮喪　既而　王師收敗
繕殘廿九日四面來攻　城
再陷　王師自此駸々進會
津　所向無前　世謂君而
不傷東北平定不知費幾歳
月　或然　君療傷會津山

し、日夜砲戦す。勝敗決せざる者五十余日なり。城北に大沢有り。八町と曰ふ。会〻長霖して潦水氾濫し、王師警備を懈る。君暗襲を図り、人をして夜々水量を測り、且つ棧を蘆葦の間に架せしむ。而して転じて山中に陣し知らざる為し、予め部署を定め、炬材を蓄ふ。七月二十四日、水減じ棧成る。乃ち之を奥羽の兵に報じ、自ら死士四百を率ゐ、夜を冒して沢を逕り、八面より火を放ち、鼓噪して城を攻む。城兵狼狽し、戦はずして潰ゆ。天明くる比、全く長岡を復す。適〻王師も亦此の晨を期し、大挙して我牙営を衝かんとし、予め精兵を見附に聚む。城中の烟燄を顧み、驚愕して反り戦ふ。我が兵之に当り頗る苦しむ。君乃ち馳せ援く。飛丸左臉に中り骨砕けて復指揮する能はず。而して奥羽の兵背より王師を破りて城に入る。王師四散して、数里の外に退く。然れども城兵君の重傷を聞き気大いに沮喪す。既にして王師敗を収め残を繕ひ、廿九日四面より来り攻む。城再び陥る。王師此れより駸々として会津に進む。向ふ所前無し。世謂ふ、「君にして傷つかずんば、東北の平定幾歳月を費せしを知らず」と。或いは然らん。君傷を会津の山中に療す。愈えず。八月十六日

って、八丁沼といった。丁度梅雨の長雨で沼の水が氾濫して、官軍の警備がおろそかになった。君は秘かに襲撃を計画して人を派遣し、夜毎に水量を測らせ、葦草の深みには小さな架橋を設けさせた。それが終ると、山中に陣を取って素知らぬふりをしながら、進撃予定の部署を定め、松明の準備をした。七月二十四日、水量は減少し、架橋も完成した。そこで奥羽同盟の将兵と連絡した後、自らは決死の兵四百人を率いて夜間に八丁沼を渡り、八方から放火して喚声を挙げ城下へと攻め入った。城下にいた官軍諸藩兵は困乱して、戦うこともなく潰滅した。夜明けごろには長岡全土を奪還した。遇然、官軍もまた此の朝を期して、大攻勢で我が本営を攻撃する予定で、精鋭の将兵を見附へと結集させていた。だが城下の火焔を発見し、驚いて長岡へ引返して戦った。我が藩兵はこのために大変な苦戦となった。君は、これを救援するために走り出た際、飛来した一弾が左すねに当って骨は砕け、再び指揮を執ることが出来なくなった。奥羽同盟軍は、官軍の後方から攻め破って城下へと入った。官軍は四散して数里の外へと退却したが、城下の我が将兵は君の重傷を聞いて、気力を落とした。やがて、官軍は敗残の諸兵を結集して、二十九日に四方から攻撃をしかけ、城下は再び敵の手に落ちた。官軍はそれ以後、快進撃を会津まで続けて行き、向う処に敵なしであった。世間では「君の負傷さえなければ、東北諸藩の平定には多くの歳月を要したであろう」と言うが、確かにそうであろう。君は傷を会津の山中で治療していたが、

中　不愈　以八月十六日
歿　歳四十二　從者火化
之葬建福寺後移葬長岡榮
涼寺先塋　配梛野氏　無
子　以甥孫茂樹奉祀　君
大顧方面眉秀而眼凸爛々
如電　或怒決眥人不能仰
視　天資英敏明決一見洞
人肺肝　排姦僞不避尊貴
　愛忠良不遺卑賤　自信
尤厚不顧死生不問毀譽
事期必成而措置縝密克耐
艱楚言論爽快能辨拆是非
一坐屈服　平生毎誦李忠
定王文成之文　李集其所
手寫象山氏題簽之　王集
方谷先生所藏君請購之
蓋喜其言渉經世也　君夙
憂我國無海軍　一日先生
召余輩談時務　君曰秋義
得志節國用購大艦任越海
一方禦侮　及爲執政果有
所豫備云　夫長岡一小藩

を以て歿す。歳四十二。從者之を火化し、建福寺に葬り、後長岡栄涼寺の先塋に移葬す。配梛野氏、子無し。甥孫茂樹を以て奉祀せしむ。君大顧方面にして、眉秀で眼凸にして、爛々電の如し。或いは怒りて眥を決すれば、人仰ぎ視る能はず。天資英敏明決、一見人の肺肝を洞す。姦偽を排し、尊貴を避けず。忠良を愛し、卑賤を遺れず。自ら信ずること尤も厚く、死生を顧みず、毀誉を問はず。事必成を期して、措置縝密、克く艱楚に耐へ、言論爽快にして、能く是非を弁析し、一坐屈服す。平生毎に李忠定、王文成の文を誦す。李集は其の手写せし所にして、象山氏之に題簽す。王集は方谷先生の所蔵にして君請うて之を購へり。蓋し其の言の経世に渉るを喜べるなり。君夙に我国に海軍無きを憂ふ。一日先生余輩を召して時務を談ず。君曰く、「秋義志を得ば、国用を節し、大艦を購ひ、越海一方の禦侮に任ぜん」と。執政と為るに及び、果して予備する有りと云ふ。夫れ長岡は一小藩のみ。而るに自ら任ずること此の如し。何ぞ其れ志を抱くの大きに、国を憂ふるの深きや。不幸外寇に死せずして、内難に死す。是れ余の深く国家の為に之を悲しむ所以なり。銘に曰く

快方に向うことなく八月十六日に歿した。歳は四十二。家僕が火葬にして建福寺へ埋葬したが、後に長岡の栄涼寺にある先祖代々の墓へ遺骨を移した。妻は梛野（なぎの）氏の出で、子がないので甥孫の茂樹が跡継ぎとなって供養をした。君は頭が大きく角張った顔付で、眉は秀で眼は突出し、眼光はらんらんとして電光の如くであった。怒った目付きで人をにらむ際は、人は正視することが出来なかった。人柄は英敏・明快で、一目で人の胸中をも洞察した。嘘やよこしまなことを排して、目上えを恐れず、忠良を愛し、下々の人を思い、自信は大で、死生を顧みることもなく、人の賞めけなしを気にせず、事は必ず成就を期待した。措置はめん密であって、よく辛さ痛さにも耐え、言論はさわやかで、是非をよく分別して論じ、周囲の人々を屈服させた。常日ごろは、よく李忠定・王文成の文章を口ずさんだ。李全集は彼が手写したもので、象山氏が書物の表題を書いた。王全集は方谷先生の所蔵であったが、君が願って購入をした。思うに、その内容が世を治めることに触れているために好まれたのであろう。君は早くから我国が海軍を持たないことを心配していた。或る日、先生が私達門下生を集めて時勢を議論させた。君は「私秋義が重職となれば、藩費を節約して大艦を購入し、越後の海の一方で外敵を防ぎます」と言った。家老職に就いて、予告通りに準備をしたとも聞く。言わば長岡は一小藩にしか過ぎないが、何という大志や憂国の情の深さであろう。不幸にして、外国の侵攻への死ではなく、内乱で戦死した。これこそ私が国家

已　而自任如此　何其抱
志之大憂國之深也　不幸
不死于外寇而死于内難
是余所以深爲國家悲之也

銘曰

憂國讜議　忠定奚恥
學儒善戰　文成惟似
時乎不幸　遭此亂離
唯護民已　何避躬危
唯防賊已　何犯王威
礧々心事　天知地知

明治二十三年八月
大審院檢事從五位
三島　毅撰

憂国讜議、忠定に奚ぞ恥ぢん。
儒を学び善く戦ふ、文成に惟れ似たり。
時なるか不幸、此の乱離に遭ふ。
唯〻民を護するのみ。何ぞ躬の危きを避けん。
唯〻賊を防ぐのみ。何ぞ王威を犯さん。
礧々たる心事、天知る地知る。

明治二十三年八月
大審院検事従五位　三島　毅撰

河井継之助碑

河井継之助は、名を秋義、蒼龍窟と号した。克己心が強く、洞察力の鋭い人であった。幕末の長岡藩を改革し、政治経済等に才腕を振った。戊辰戦争で縦横無尽に戦い負傷して慶応四年八月十六日、四十二歳で会津塩沢にて没。

のために悲しむことである。銘を作ったので述べる。
憂国の正論は李忠定にもひけをとらなく、儒学を身につけて善戦したことは、王文成にもよく似ている。時は彼に味方することなく、あの戦乱離散に会う。ただ領民を守るに徹し、自身の危険をも省ることなく、専一に賊徒を防ぐ。天子の威光を犯すなどは毛頭もなく、彼の心に在った数々は、天地だけが知ることであろう。

明治二十三年八月
大審院検事従五位　三島　毅文を撰す